

共同研究室

昭和57年度第6回研究会(9月17日)

▶テーマ 『経済学とイデオロギー』によせて

報告者 上野俊樹氏

報告要旨

I

拙著『経済学とイデオロギー』(有斐閣)について、『経済』(1982年9月号)誌上において梅垣邦胤氏より簡潔で要点をえた書評をいただいた。これを参考にしながら、少しばかり現在考えていることをのべてみたいと思う。

『経済学とイデオロギー』は大きくいって3つの部分からなっている。第1の部分は、1章から4章までの部分で、ここでは経済学史の方法が扱われており、その要点は以下のようなものである。経済学史の研究は一般的には過去の経済学的認識(史)のみを対象とすると考えられており、したがって、従来の経済学史の研究の多くはその研究が現実の経済的諸問題と意識的に関わってこなかったし、また現実の経済的問題の研究の一構成部分としておこなわれる経済学史の研究の方法はいかにあるべきか、ということについてもあまり考慮がはらわれてこなかったと思われる。拙著のこの部分では、こういう研究の現状をふまえて、既知の認識の内部のみとどまるような研究では論理は一般的には発展することはできないということを明らかにした。その際、わが国のマルクス主義的研究のなかにも、こういう解釈学的研究——認識の発展の動力をカテゴリーの内部の矛盾にのみみておこなわれる研究——の不十分性をはっきりとつかんでいない見解が存在するので、これを批判しながらこうした研究の不十分性を明らかにした。松村一人氏の見解は、一方ではヘーゲルの誤りを正しく批判しているのであるが、他方では、認識の発展の動力をカテゴリーの内部の矛盾にみるというヘーゲル主義の見解の誤りを克服していないという点で不十分性をもっているのである。

経済学史的研究は、現状分析と有機的一体をなしておこなわれなければならない。それは現状分析と結合した理論の発生的研究でなければならない。宇野説は、こういう経済学史的研究の見地からみれば、現状分析と原理論を一般と特殊の関係にない2つの領

域に区分している点で誤っており、また、経済学史の研究を原理論の研究との関係においてのみみている点で誤っている。

以上のように、松村氏らの見解と宇野説の検討をとおして経済学史的研究のあり方と方法について私の見解を提起したので、ご批判をいただければ幸いである。

第2の部分は、5章～8章であり、ここではイデオロギーの概念とその機能と構造をとりあつかっている。ここの部分をみちびく問題意識は以下のようなものである。

科学的認識は、それがイデオロギーに転化していないかぎりにおいては、直接的には人びとの生活をみちびく実践的意識ではない。しかし、結局はそれは人びとの生活をみちびき、現実を変革する実践的意識でなければ意味をもたないのであるから、科学的認識はイデオロギーに転化して人びとのなかにもちこまれなければならない。そして、科学はイデオロギーのなかに、すなわち、人びとの実践的意識のなかに自らを発展させようとする要求を汲んでこななければならない。宇野説はこのことを全く理解していない。

これが宇野説の1つの側面であるが、こういう宇野説的見解がどうして生じ、その現実的役割は一体どのようなものなのかを明らかにしたいというのが、私がイデオロギー論と本格的にとりくむようになった直接的動機であり、この研究をみちびいている問題意識である。

宇野説の批判をとうして私が到達した見解は、第1に、人間の認識は科学的認識とイデオロギー的認識の二重の構造からなっているということであり、この2つの認識は現実の人間の認識のなかで相互に浸透しあっているということである。

第2に、イデオロギーは従来マルクス主義の立場においても、狭く理解され、たんなる虚偽意識として考えられてきた。しかし、イデオロギーは広い意味では、レーニンのようにイデオロギー的社會關係＝上部構造的社會關係のことであって、それは狭い意味でのイデオロギー概念、すなわち人間の意識、諸見解、世界観などにのみ解消して理解されてはならないのである。

第3に、狭い意味でのイデオロギー概念についても、それを階級社会における誤りという意味での虚偽性を主要な側面とする支配的イデオロギーとのみ理解してはならない。虚偽意識というのは、誤った意識という意味をももっているが、その根本的な、第1次的な意味は「自らの発生根拠を知らない意識」という意味である。原始宗教などにみられるような自分たちをとりまく世界についての幻想的な実践的意識は、階級社会の支配的イデオロギーのように被支配階級を支配するうえでの非真理としての虚偽意識ではな

いのである。

実践的意識としてのイデオロギーは、道徳や法律によって何らかの意味でその行為に外的強制の加わる実践的規範意識と、そういうものがほとんど加わらないたんなる実践的意識との2つに区分される。後述するように、『経済学とイデオロギー』ではこの区別が明確になっていない。本書の不十分点の1つである。

第4に、広狭の二重の意味をもったイデオロギーは社会のなかで具体的に働いて人びとを組織し、統合する。これがイデオロギーの機能的側面であり、その運動過程である。フランスの哲学者、ルイ・アルチュセールの功績あるいはその肯定的側面は科学的認識とイデオロギー的認識の区別をしたことと、イデオロギーの機能的側面について考察したことにあると思う。本書では、もっぱらアルチュセールのイデオロギー論の肯定的側面に焦点をあてて彼の見解を批判的に分析した。

なお、アルチュセールのイデオロギー論についての私の研究が本書のような形でまとまるにあたっては、向井俊彦氏をはじめとして、佐々木煇代三氏、角田修一氏らとともにおこなってきた人文科学研究所の「方法論研究会」での討論に多くのものを負っている。これらの諸氏に、そして、とくに向井氏にはこの場以外においても多くのことを教えていただいたことを本誌上をかりてお礼申しあげたい。

拙著の第3の部分は、9～11章であり、ここでは第1の部分で展開した経済学史の方法と第2の部分で展開したイデオロギー論を媒介にして、わが国の代表的な経済学史の研究の方法である「思想史的方法にもとづく経済学史研究」の立場からなされた内田義彦氏と平田清明氏の経済学史の研究を批判的に分析した。

両氏の研究は、経済学史研究の科学的方法を自覚的に確立したうえで、過去の理論的遺産である科学的認識説にたいして、経済学的認識（科学的認識）を深めるためにたちむかったものであるとはいいがたい。両氏の研究が従来の解釈学的研究にたいして批判的であったということは内田氏の『経済学の生誕』においてもみられるところであり、これが両氏の研究の一定の肯定的側面ではあるが、しかし、結局のところ、これらの研究は経済学史の科学的方法を確立していないために、また、科学的認識とイデオロギー的認識の区別をしていないために、特定のイデオロギーを前提としたイデオロギー的立場よりする解釈学となっている。

したがって、こうした経済学史的研究は現状分析と有機的に結びついていないのである。だから、これらの研究の科学的意義は経済学史的研究をふくんだ科学研究の総体

のなかで、現実のすくなくともその基本的部分が解明された時にのみ明らかとなるのであり、これらの研究を方法的にみれば、それはそれ自体の内部において自らの科学性を証明することができないような方法でもってなされた仕事となっているのである。また、これらの研究のイデオロギー的意義は現実のイデオロギー的社會關係と經濟的土台の科學的分析によって現代のイデオロギーのすくなくともその基本的部分が明らかにされた時に、はじめて理解されることになるといえよう。

II

以上が拙著の概要であるが、やはり、今後さらに深めなければならぬいくつかの問題が残されている。その第1は、梅垣氏が前掲の『經濟』誌上で「なぜ支配者のイデオロギーが『社會成員全体のイデオロギー』になるかという点について、……客觀的基盤の具体的内容（商品生産者としての同權的關係、労働力の価値の労働の價格への転化など）への今後の論究を期待する気持はのこった」と指摘されている点である。この指摘を私なりに一般化していえば、こうであろう。すなわち、經濟的諸關係がどのようにして法的構造として固定化するのか、あるいは、どうして土台としての經濟的諸關係がもつ支配—被支配の關係が、上部構造における法的イデオロギーにおいては平等の關係として、同權的關係として現象するのかという問題であると思う。これについては、確かに、本書ではあまり深められていないのであり、現在、『立命館經濟學』に執筆中である「社會的共同業務と國家」のなかで、これについてできるかぎり意識的に追及するとともに、「法的イデオロギー」の研究という独自の課題として研究をさらに深めたいと思う。

第2の問題は次のようなものである。

イデオロギーは人間の行為をみちびく意識であるのだから、それは人間形成あるいは人格形成に関わっていることはいうまでもない。イデオロギーの人格形成に果たす役割についての研究は2つの側面から研究されなければならない。

1つはこうである。人間はだんだんと成長するにつれて生得的な人格的諸要素——たとえば、氣質、志向性、科學的・藝術的分析力、學習・教授能力などの諸領域において區別されて把握される人格的諸要素——に、自分をとりまく社會關係のなかで獲得した人格的能力や人格的要素をつけくわえて、人間として成長していく。もちろん、生得的な人格的要素と社會的に獲得した人格的要素は相互に浸透するのであるから、人間のなかで生得的要素が絶對的な位置を占めているのでないことはいうまでもないことである。

中学生ぐらいから、人格形成においてだんだんと社会関係の比重が大きくなっていく。幼少期になればなるほど、この社会関係は親や兄弟姉妹の狭い範囲に限定されており、成長するとともにその範囲は広がっていく。成人すれば、人間は経済的社会的関係とイデオロギー的社会的関係の総体のなかの自らが関係する社会関係に基本的に規定されながら自己形成をしていくのである。したがって、このことがイデオロギー論として研究されなければならない。また、学校教育はこのような人格形成にたいしてどのような意義をもち、また、どうあらねばならないのか。これについて考えながら、アルチュセールの「学校が支配的な国家イデオロギー装置である」という見解をもっと深めてみる必要があるであろう。もう1つは、人間はイデオロギー的社会的関係のなかで人格形成をするのであるから、やはりアルチュセールのいう「写鏡的關係内での再認—否認の作用」をもつイデオロギーの機能が人格形成にどんな影響をもつのかということについて、具体的にイデオロギー的社会的関係を分析することによって、明らかにする必要があるであろう。

これについては少しばかり「イデオロギーと人格形成の危機」(『文化評論』1983年2月号)で少しばかり展開してみたが、非常に不十分であり、上部構造論の研究を視野に入れて一層深く研究してみなければならない。

第3の残された問題は、経済的イデオロギーの問題である。私は近代経済学を全面的な虚偽としてみることに反対である。それは現状をただ肯定的にのみみる支配階級の支配的イデオロギーであるという側面、したがって、現実を誤って描きだすという役割をになった虚偽意識という側面と、もう1つ、実践的イデオロギーという側面をもっていると思う。経済学史上において、この実践的イデオロギーという側面はすでにT. R. マルサスのなかにおいてみられるのである。マルクス主義は近代経済学を批判するにあたって、この点を明らかにしたうえでそれを批判してきたとはいえないと思う。

いわゆる近代経済学的手法をマルクス経済学の立場からどのように評価するかということを考えるにあたって、近代経済学のもつ実践的イデオロギーの側面を考察しなければ、その評価は正しいといえないであろう。

このことをケインズとケインズ以後の経済学をも視野にいれて経済学史の実際にあたって証明していきたいと思っている。論文「デイヴィッド・リカードウ」(『経済』1981年6, 7, 8, 9月号)と「T. R. マルサス」(『経済』1982年7, 8, 9月号)はこの作業の一環として書いたものである。今後、この作業をさらに進めていきたいと思っている。

以上にのべたこと以外にも、拙著『経済学とイデオロギー』は多くの不十分な点をもっていると思われる。大方の忌憚のない批判をいただきたいと思っている。

昭和57年度第7回研究会（10月8日）

▶ テーマ 経済発展の理論についての一試論
——佐和隆光氏の所論をめぐって——

報告者 浜崎正規氏

昭和57年度第8回研究会（10月29日）

▶ テーマ ソ連・東欧圏の地域経済問題
——見たまま感じたまま——

報告者 杉野園明氏

報告要旨

本報告は1981年7月28日より1982年9月5日までの国外留学期間中に巡検した35ヶ国のうち、ソ連・東欧の社会主義諸国における地域経済問題について、いわば卒直に見たまま、感じたままを述べたものである。すなわち、現時点では、統計書や関連した文献を参考することが時間的に困難であるための止むなき方法である。

以下、各地域別に、報告者が見たこと、そして感じたことを項目毎に列挙する。

① ハバロフスク

- 商店街の不均斉と売場の非機能的配置
- 排水施設の不完全性（大雨による道路の水没など）
- 市街地内工場の市外への計画的移転

② イルクーツク

- 青空市場の存在と社会主義的配給機構のあり方
- 開拓時代の建物保存と都市機能の不能率性
- バイカル湖をとりまく観光施設の不十分さ
- バイカル湖の汚染防止対策と透明度

③ ブラーツク

- 巨大ダムの建設にともなう生態系の変化および旧集落移転と新しいアパート群の形成

- 木材・パルプコンビナートの建設とそれにともなう労働力調達問題，とりわけ賃金の地域プレミアム制および労働者の自由移動問題
- ④ タシケント
 - 小規模生産者の存在と協同組合組織の有無
 - 1965年の大地震とその復旧過程
 - 非衛生的地区の残存
- ⑤ サマルカンド
 - 広大な史蹟地と墓地としての利用
 - ムガル期 of 史蹟復旧作業
- ⑥ バクー
 - 石油採掘と海洋汚染
 - 都市廃棄物の無断投棄
- ⑦ モスクワ
 - 都市構造として副都心の形成およびその機能の不十分さ
 - モスクワ環状道路の現状とその将来展望
- ⑧ ソチ
 - 温泉，水浴による療養システム
- ⑨ ウランバートル
 - アパート群の建設とゲルの残存
 - ラマ寺の保存と観光化
- ⑩ グダニスク
 - 旧港と新港建設，工業用地を背後にもつ新しい開発の可能性
- ⑪ 東ベルリン
 - ベルリンの壁による同一都市の二分化と統一後の都市計画の見通し
 - ボーヌンク・コンプレックスの建設
 - 地下鉄等公共料金の低廉性
- ⑫ ハレ周辺
 - 露天掘炭鉱跡地の状況と内陸コンビナートの形成。刺激臭のある排液のタレ流し
- ⑬ ブカレスト
 - 午前5時30分からの行列

◦ 村落博物館と各地方の民屋の保存

⑭ プラハ

◦ エネルギーの節約と街灯, 暗いプラハ

⑮ ソフィア

◦ 龐大な失業者 (多分) の存在

⑯ ベオグラード

◦ 新ベオグラード, 新しい住宅地域の建設としては世界一の規模

[その他]

◦ プハラ: 旧市街の残存とその劣悪性

◦ ワルシャワ: 多数のドル買い人

◦ ドレスデン: 工業地区の漸次的復興

◦ ロストック: 廃船利用の博物館

最後に, 社会主義諸国の各地域にあてはまる一般的問題点の提起

① 電化製品の不足

② 商店におけるサービスの悪さ

③ ペトン式建築と防音の不十分さ

④ カッサ制度のメリットとデメリット

⑤ 大都市周辺におけるセカンドハウスの大規模な建設